

シンポジウム講演録

日本で暮らす南米にルーツをもつ人の

現在から次世代へ

金城 ナラヤ ナツミ 上江洲恵子 神田すみれ

日本文化学部では、歴史に埋もれさせてはならない事実に向け、社会にかき消されてはならない声に耳を傾ける企画として、2022年度より、『ポリフォニー的世界への窓』を開催している（人間の尊厳と平和のための人文社会研究所・地域連携センターとの共催）。半期に一度のペースで、前期には第1回「花岡から考える中国人強制連行」として、第2回は「朝鮮学校と日本社会」と題して、それぞれ3名の講師の方にご報告いただいた。2023年度も「3・11 子ども甲状腺がん 日本の原子力政策」と題して第3回を前期に、「日本で暮らす南米にルーツをもつ人の現在から次世代へ」と題して第4回を後期にそれぞれ3名の講師方にご報告いただいた。以下に掲載されているものは、それをテープに起こし、報告者によって加筆訂正し、原稿化したものである。

専門家と当事者、当事者の傍らで現場にいた方、そうした人々の、想いの一端にでも触れることができる文章として、ここに記録しておきたい。

（日本文化学部長 樋口浩造）

金城 ナヤラ ナツミ 「第2世代として日本で生きる」

こんにちは。只今紹介に預かりました、NPO 法人ブラジル友の会の金城ナヤラナツミと申します。よろしくお願いいいたします。本日は、私の生い立ちと、日本に来てから大人になり、社会人として生活していく中での苦労を交えながら皆さんにお話を共有させていただければと思います。

まず私のプロフィールです。ブラジルのサンパウロ州で生まれ、1997年2月19日にブラジルを出発して、日本に参りました。小学校2年生の2学期までは、ブラジル人学校と呼ばれている、日本にあって認可されていない学校に通っていました。小学校2年生の3学期から日本語が全く話せない、読み書きができない、日本語ゼロの状態での日本の学校に編入しました。なので、先生が授業中に日本語で喋っていても何を言っているのか全く分からないし、日本の小学校のルールも全く分からない、ルーティンも分からない中で入ったので、本当に苦勞しました。日本の小学校と中学校を出て、高校に行って、金城学院大学の福祉の学部に進みました。大学院にも進学し、修士課程を修めてお仕事をさせていただくようになりました。経歴としては愛知県庁や放課後等デイサービス、児童発達支援事業、児童指導員と管理者を兼務しながら仕事をさせていただいた後に、愛知県国際交流協会でも文化ソーシャルワーカーの仕事をして、その後岐阜の国際交流センターで相談員をした後に現在は児童心理司として仕事をさせていただいております。

小学校での生活は、先ほども少しお話ししたのですが、2年生の終わりまではブラジル人学校に通っていました。2年生の3学期から日本の学校に入って、日本語が分からないので友達がまず作れませんでした。言葉が通じず、日本語の読み書きができないので、日本語教室と呼ばれている別の教室で日本語を学びました。これは外国の子どもや日本語ができない子が通う、公立学校の中にある取り出し授業です。学校の授業についていくのが難しく、どうしても日本語の壁があったので、学校の授業とは別で小学校4年生の時から家庭教師を付けていました。ここでは貴重な体験としてお話をさせていただいているのですが、小学校5年生の時に担任の先生が私ともう1人同じクラスにブラジルの子がいて、「あなたたちはブラジル人だから廊下で授業を受けなさい」という風に言われました。なので、この教室でいうところの廊下に机と椅子を並べて、そこで日本語が分からない状態で授業を受けていました。

中学校では、中1になって日本語も少しできるようになりましたが、中学校生活に慣れるのにもすごく努力をしましたし、勉強はやはり日本人のようににはできないということで、毎日家庭教師をつけてもらって勉強を頑張りました。中2に時にもブラジル国籍であるということから、同じクラスの子にいじめを受けて、1年間の中で47日間休んだりして、色々と不安定な時期を過ごしました。中3の時は思うように成績が上がらなくて、さらに家庭教師を増やしてもらって、土曜日は英語に力を入れて夜の7時から深夜1時まで勉強しました。高校受験は、私立の高校に行きたかったので推薦を貰おうと先生をお願いをしましたが、「あなたはブラジル人だから、どうせ工場で働くから、推薦なんていらないでしょ」と高校に行く必要が無いと言われたので、「もういいです」という風に言って、単願の一般で受けて、無事合格しました。

やっと高校に入れますが、やはり授業について行くのがすごく大変で、先生とも合いませんでした。欠点席と言われる席があったのですが、教室の前2列でした。テストで欠点を取る人が座る席だったのですが、私は欠点を取らなくても「おまえは勉強ができないからここに座りなさい」とずっと指定をされていました。1年間乗り越えて、高校2年生の時に担任が二人になって新人の先生とベテランの先生がついて、たまたまベテランの先生が英語の先生で色々支援してくださって、成績が上がるようになり、クラスで1位、学年で1位を取るようになりました。名前がミドルネーム、ナヤラという名前がついていることで、よく「おまえはブラジルに帰らないのか」という風に廊下を通るたびにからかわれました。元々私は通訳になろうと思い、英語を勉強しようと思っていたのですが、友達の付き添いでたまたま金城学院大学のオープンキャンパスに行ったら、大学の時の先生である朝倉先生に出会うことができまして、その時に通訳ではなく社会福祉士になりたいと思い、勉強を始め、夢も変えました。高校3年生の時は受験勉強のために一生懸命勉強して、A0入試で受験したので、小論文を書く必要がありました。やはり日本人みたいに文章を書くのはどうしても壁があり、夏休みの間は沢山小論文の対策をして、9月にA0入試を受けて、10月には合格している状態になっていました。

そもそも私が福祉の学部に進もうと思った理由は、日本に住んでいる外国人と日本人との架け橋になりたいというのがずっと夢としてあったからです。私と同じように日本に来た外国人が生活で困っていることについて、自分も外国人だから少し理解で

きると思い、そういう方たちの支援がしたいと思い福祉の学部に進みました。やはり日本には多文化ソーシャルワーカーというのが広まっていないし、知られていないと思うので、それを広められるようにしたいと考えました。

大学に入ったら大学に入ったで大変でした。授業について行くのも大変だし、専門用語も沢山出てきて、漢字一つ読めないと何を言っているのか、何を書いているのかわからない状態だったので、日本語—ポルトガル語とポルトガル語—英語の電子辞書を使いながら、「この文はこういうことを言っている」「こういう漢字を使うんだな」という風に、日本語から英語に変えて、英語からポルトガル語に変えて勉強していました。でも英語は元々得意だったので、ESS というサークルに入ってさらに英語を磨いて、夏休みにはボランティアでホームレス活動として炊き出しボランティアをしました。大学2年生になって授業がどんどん専門的になっていくので、「福祉を勉強していて楽しいな」とか「早く社会福祉士の資格を取りたいな」と思っていた時期でした。手話にも興味を持ったり、子どもの福祉に興味を持ち始めたりしたのはこの時期からでした。その傍らで、やはり社会福祉士の国家試験に合格できなかつたらどうしよう、合格できなかつたらどこに就職しようかという不安はありました。大学3年生に入って勉強の内容がさらに難しくなっていく、「私は何のために大学に行っているのだろう」と考え、自分の目標を失い、大学に行くことすら億劫になった時期でした。ただ、夏休みの社会福祉士の実習に行き実際に社会福祉士の方が現場で働いているのを見て、もう一回自分の目標を持ってやってみたいと思い、このときに大学院に行くことを決めました。それは、もっと外国人について研究したいということと、ブラジルの社会保障制度をもっと学んでブラジルの日系人だけではなくて、ブラジルの国民全体が高齢化していることに着目して、自分が勉強してきたことをブラジルに伝えられたらいいなという思いがあり、大学院に進もうと決めました。大学4年生の時に日本財団の奨学金と JICA の奨学金を申請しました。日系人向けの奨学金と言われているのですが、すごく競争率が激しく、南米の人も日本に住んでいる人も受ける奨学金です。日系社会リーダー育成事業という奨学金なのですが、100人中5人しか受からないと言われているものを申請して、無事受かり、大学院の入試も受かり、大学院に進むという道にしました。

晴れて大学院に進学して、「日本における日系ブラジル人の高齢者の現状と課題」という修士論文のテーマで研究をしたのですが、やはり日本語の理解が難しいということで、物事を論理的に考えるのが難しいと改めて痛感した時期でした。本を読むのも日本人と比べると時間もかかるし、日本語を1回読んでも理解できないので、日本語の理解力をつけないといけないと思いました。どうしても私の研究分野は先行研究がなかったので、レビューをするのも難しく、先行研究を探すのも大変でした。色々苦労を感じながら、冬休み中にブラジル人の高齢者の現状を知るためにプレ調査を行って、私がやっていることは間違っていないんだと思い、日本で高齢化しているブラジル人について研究をしました。大学院に行っている間、両親が私が小学校の時に立ち上げた NPO 法人ブラジル友の会がありました。岐阜県で初めて当事者のみで作られたブラジル人保護者で作られた NPO です。今はもうしていないのですが、ここでは放課後学習支援教室というものを長年やっていて、当時は日本の公立学校に通う小中学生

と高校生に勉強を教える活動を行っていました。今まで経験してきたことを子どもたちに伝えたい、手助けができるかなと思って始めました。このときに高校まではブラジルの子は進学ができるんだけれども、大学に進学をすることがすごく難しいということを見て、学習支援をしていく必要があることから、岐阜県の補助金を受けて高校生を対象に学習支援を始めました。夢も、通訳から社会福祉士に変わりました。実際に夏休みにブラジルにも行って、20年ぶりにブラジルに帰ったのですが、異国でした。2週間経ってすぐブラジルから日本に帰りたくなりました。すごく異国です。居場所ではなかったです。3ヶ月滞在し、ブラジルにいる日系人の高齢化について研究をしました。ブラジルに住んでいる、実際に日本に出稼ぎ経験のある高齢者にインタビューを行って、日系人のための高齢者施設の見学にも行きました。

お仕事の方なのですが、愛知県庁の多文化共生推進室というところで1年間務めさせていただいて、多文化共生施策に関する業務ですとか、ポルトガル語翻訳業務在名古屋ブラジル総領事館に関わる業務などをさせていただきました。その後、児童福祉施設、放課後等デイサービス、児童発達支援事業と呼ばれているところで管理者をしていたのですが、これは、障がいを持っている外国の子どもを対象に立ち上げた事業で、当時は外国籍だけを専門に扱う施設が地域になかなか無くて、私たちが一番初めと言われていました。その後も、名古屋市内の方でも日本人向けの放課後等デイサービスで勤めた後に、また2021年に岐阜県可児市でも同じようなものを立ち上げ、許可を得て障がいを持つブラジル人について研究しました。

その中で見えてきた課題があります。児童発達支援事業というのは、0歳から未就学の6歳までの子どもたちが通うのですが、その中のブラジル国籍の子どもとその家族が抱える問題は、母子家庭で親子が孤立してしまう、日本語が話せないことによって幼稚園、保育園に入ることができないことです。やはり障がいがあるので、集団行動ができないことや、おむつが外れていないことから園に受け入れを断られてしまいます。保護者も日本語が話せず、情報が足りないのです。また、親がその障がいの受容ができていないところや、国籍によって障がいの概念や捉え方が違うという風に感じています。フィリピンの家庭を受け入れていたのですが、フィリピンの方もまた違う考え方があってブラジルの方もまた違う考え方を持っています。でも日本にいるから日本の制度に則ってやらなければいけないというところでやはり難しさを感じました。あとは医療機会に繋がらないということと知能検査の壁があるのですが、これは後ほど説明させていただきます。

では、放課後等デイサービスとは何なのかというと、6歳から18歳までの障がいを持っている子どもが通うところです。これも同じように情報が不足していますし、特別支援学級での支援が本当に正しい支援なのか、日本語が分からなくて特別支援学級に入っている子もいれば、障がいの診断が無い状態で入っている子もいるという事実があります。なので、本当に障がいがあるのか、日本語が壁となって特別支援学級に入っているだけなのかという線引きができていないという現状がありました。保護者が孤立してしまうとか、福祉サービス、医療サービスにつながらないことも問題です。保護者の孤立や情報不足はなぜかということ、例えば保護者がうつ病だとします。母子家庭でお母さんが子どもと一緒に引きこもってしまいます。そうすると、子どもを外

に出せなくなってしまう。私しか子どもを守れないというように、他人を信用できず、母子ともに孤立をしてしまいます。孤立をしたことにともなって、子どもの発達が遅れてしまいます。そして公園に連れて行くなどの外部との関係が途絶えてしまうので、さらに子どもの発達が遅れてしまいます。そのため、普通の子が保育園に行っている間に促される発達が奪われてしまうという風なことがあります。あとは保護者が子どものために全てやってしまうので、5歳で保育園に入ったとしても入れないし、5歳になっても6歳になってもおむつが外せないで学校に行くのが大変ということもありました。あとは情報が不足したことに加えて、日本語が話せないことによって、保護者はどこに助けを求めれば良いのかというところで、私たちは相談、支援をしていました。障がいの受容を保護者ができないと、保護者にしか自分の子どもを守れないという考え方もしてしまいます。

先ほどお伝えしました知能検査の壁なのですが、知能検査というのはIQをはかるテストで、どうしても日本語でIQをはかる知能検査になってしまいます。行政機関などで行っているのはたいてい田中ビネー検査をやります。田中ビネーというのは、日本人向けの知能検査なんです。日本の文化の中で育った子どもが受ける検査です。世界共通の検査もあるのですが、全ての行政機関が、「じゃあ外国人だったらこの検査をやりましょう」という訳にはいかないのです。田中ビネー式の検査でやってしまうことが多いです。日本語による日本人の心理士の知能検査が行われるので、心理士によって外国籍の子どものことに理解があるのか無いのかで検査に影響が出てきてしまうのではないかと思います。昔、通訳として検査に立ち会うことがあったのですが、実際に私が通訳で入ったときに心理士から聞いた言葉が、5歳の子どもに対して「紙を切るために使用するものはなんですか」という言葉遣いをされていました。5歳の日本人の子でも「紙を切るために使用するものはなんですか」という問題が理解できないと思います。でも、そういう心配りというものがなかったんじゃないかなという風に思いました。逆に、東京の病院ではポルトガル語でブラジルの心理士による知能検査が受けられる病院もあって、そこに子どもを連れて行くと、日本語の知能検査を受けたときよりもIQが20上がったという子もいました。実際に私が病院に連れて行って、ポルトガル語で検査を受けてもらったらすごくIQが上がっていました。なので、何が問題なのかというところは、そもそも論として日本語でやったら問題じゃないですかというところが理解されづらいと思いました。

やはり制度から漏れてしまう、福祉サービスに繋がらない、日本語が話せないことによって情報が足りなくて、福祉サービスに繋がらない子が沢山いると思います。児童発達支援事業から放課後等デイサービスに上がる時にも、受給者証というものが存在しているのですが、受給者証と療育手帳の違いが分からなくて、実際に「私の子どもは障がいを持っていないのに何でこんなレッテルを張られるようなものを受け取る必要があるのですか」と言われ、「違いますよ。療育手帳とはこういうもので、受給者証というのはこういうものなんですよ」という説明をすると、理解してくれました。あとは医師の存在です。外国籍児童のことが理解できる医師というのがすごく貴重だと思っています。私が地元で連れて行ったことがある病院が一つあるのですが、そこで子どもはポルトガル語しか理解できなくて、お母さんと勝手に日本語ではなくポル

トガル語で話すんです。「ブラジルに帰ったらどうですか」と普通に言われました。ストレートに言われました。じゃあ何のためにこの病院に助けを求めに来ているのか分からなくなってしまう。日本で子どもを育てたいという思いで助けを求めたくて医師に相談しに来てそうやって言われたら、差別をされたように感じてしまうということがありました。学校の理解というのもすごく大事で、通常学級と特別支援学級を選択する権利が保護者にも子どもにもあるということを、学校の先生は教えてくれない、あなたの子どもは特別支援学級に入らなきゃいけないという風に言われます。戦争という言葉を使っているのですが、学校の教育の現場の先生方は、どうしても間違った働きかけをしてしまうので、保護者がすごく大変な思いをしてしまうということが見えました。

今日のテーマの第二世代というのは私たちということですが、そもそも第二世代というのは何ですかと言われるのですが、私は子どもの頃に日本に連れてこられた私のような子ども、もしくは日本で生まれた外国籍の子で、現在は大人になって親として、または一人の人間として日本の社会の中で生活している人たちのことを指しています。子どもの頃から日本で私のように教育を受けて外国籍児童が抱える課題を乗り越えてきたその一部の中には、どうしても誤った道を選択していった人もいれば、高校や大学院に進学して現在は親になっている人もいます。みんな社会の一員として税金を払ったりしながら日本で生活しています。その中で私たちが子どもの頃は未就学の子どもの問題やリーマンショックの問題など色々あったのですが、一番言われているのはダブルリミテッドと呼ばれている問題です。アイデンティティの問題というのがとても顕著になった時代だったんじゃないかと思います。あとは、日本人として育てられてきたというか、日本人だと思いこんで育った人が第二世代で今大人になっている人もいます。なので母国語が話せなくて日本語しか話せないブラジル国籍の大人が沢山います。その中で声を上げられない第二世代の私たちというテーマをつけました。先ほどお伝えしたダブルリミテッドというのが、日本語も母国語も正確に理解できなくて両言語が中途半端になってしまう状態とか、アイデンティティの問題というのは自分が一体何人なのか分からなくなってしまう、日本で育ったけど自分はブラジル人。でも母国のブラジルは異国で帰る場所がないというところで私は何人なのかと言われると分からなくなってしまう。その葛藤の中で生きていくということがアイデンティティの問題になります。やはり私たちの居場所や生活の拠点というのは日本だと思います。私はブラジルに20年ぶりに帰ったのですが、やっぱり居場所では無かったです、異国でした。

あとは社会に出た中で外国籍という壁がすごく大きく存在すると思います。例えば、私は今児童心理司として働いているのですが、私はずっと福祉を勉強してきました。児童福祉司になりたいのですが、国籍が日本じゃなくなれませんかという壁があり、私は児童福祉司ではなく児童心理司の道を選びました。保育士になりたいだけでも国籍条項でなれない、先生になりたいだけでも国籍条項でなれない、警察官や消防士ももちろんそうですし、自衛隊に入りたくても国籍条項で入れない、裁判官や警察になりたいだけでもなれませんか、もちろん参政権もありません。なので、今の日本の政治のことをたとえ少ししか分かっていなくても声を上げたいなという気持ちがあるけど、「あなた

は外国籍だから黙っててください」というのが私たちに伝わっている現実だと思います。

その第二世代が親になったというのが今増えている、第二世代の親というのは日本で教育を受けた子どもの頃は自分の親は仕事が精一杯でとても不安定な中で生活をしていたので、子供と接する時間も少なく、大変な中、日本で生活していた人たちが沢山いると思います。やはりその時は授業参観や運動会に参加したくても、行くと工場から解雇されてしまうという事実がありました。その中で子供を一生懸命育てていたとも思います。先ほどお伝えしました未就学の問題も顕著になっていた時代だったので、親が仕事に専念してしまうことで非行に走ってしまう子どもが沢山いました。あとは、早くに子どもを産んでしまう、親になってしまうケースも沢山ありました。私の周りにも中学校まで一緒だったブラジルの女友達が今年 31 歳なのですが、子どもが二人いるとか、18 歳で子どもを産みましかが本当に普通なんです。私は大学院まで行ったので、やはり色々な面で友達と比べると遅かったです。でも、何が正しいんだろうなということ自分で迷ってしまうときもありました。あとは、ダブルリミテッドの問題によって日本語も母国語も中途半端な状態でした。今の第二世代は工場労働以外の職に就くことができ、雇用形態も少しは安定してきているのではないかと思います。しかし、マイノリティではあるのですが、どうしても自分が子どもの頃に親に厳しく育てられた関係で、寂しい思いから非行に走ってしまった時期があります。また虐待が存在してしまうケースは存在すると思います。第二世代の子ども、要するに第三世代。私の代が第二世代なのでその子どもなのですが、その問題というのは、やはり日本語の方が得意で、母国語を話すことはできるのですが、読み書きができない状態や先ほどお伝えしたアイデンティティの問題でさらに悩んでしまいます。今の第二世代の子どもは日本で生まれているケースが多いので、どうしてもブラジルってどこなのかが分からないんです。私が異国と感じる以上にさらに異国なんです。自分は日本で生まれてるし、でも国籍はブラジルだし、すごく分からなくなってしまう世代だという風に思います。早くに親になってしまったので子どもが生まれたら、外国籍の子どもは日本で生まれたらその国の総領事館に届け出をしないとイケません。届け出をしないと無国籍状態になってしまいます。今の親が手続きの方法を知らず、後でいいやと思ってしまっただけで子どもが小学校 6 年生とか高校 3 年生とかになってしまっただけで、そういう子どもに最近出会うようになりました。最近多いという風に思います。パスポートもないので、日本では外国籍だし、定住者や永住者の在留資格もあるのですが、ブラジルではブラジル国籍がない、ブラジルのパスポートを持っていないので、日本で生活をする中で結婚しようと思ったら国籍がないので結婚できなかったりとか、色々な行政上の手続きができなかったりとかという問題が存在しています。その中で第二世代の社会参加というところで、様々な制約がある中で私たち第二世代は社会の一員として日々日本で生活していますし、日本人と同じように働いて日本人と同じように税金を納めています。しかし、帰化をしても、行政上、手続き上、紙上では私は日本人だとしても、日本人として見て貰えないということが存在すると思います。アパートを借りるにも外国籍だと大変で、6 年前の私が大学院の時に、弟と一緒に名古屋でアパートを借りようと思ったら、不動産の人に職質をされたんじゃないかという

くらい色々なことを聞かれました。「なぜその大学院でその勉強をしているのですか」「なんのためにそんなことをするのですか」と聞かれて、結局当時は永住権を取っていたのですが、日本人の保証人がいないと借りられないということがありました。3年前に名古屋でアパートを借りたときは大分良くなってきたのですが、やはり永住権を持っていないとアパートを借りられないということもありますし、外国籍だとごめんなさいと断られてしまうことも多々ありました。弟と一緒にアパートを借りようと思った6年前の時は、弟が言った一言を鮮明に覚えています。弟は当時大学生で日本人と同じように勉強して、日本人よりもある程度努力をして、日本人と同じ、高等レベルの大学に進学したにもかかわらず、「なんで外国籍ということだけでこんなことを聞かれなくてはいけないのか」と私を問い詰めて、「これは外国人だから普通にあることだから慣れてね」と私が言ったことも覚えています。要するに、私たちは声を抑えて日本で生きていかななくてはいけないということがあると思います。

現在は社会の一員として日本人のパートナーと一緒に岐阜県で戸建てを購入し、地域で生活しています。日本人としてではなくて、日本で育った少しだけ日本の文化や風習を理解できる二世世代のブラジル人として生活しています。今後もこのような機会をいただきながら二世世代の日系ブラジル人として生活をしていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

上江洲恵子 「リーマンショックとケアセンターほみ立ち上げから考える今後」

（司会）洲脇

次は上江洲先生なのですがけれども、ここで神田先生にも入っていただいてお話いただくと思います。お願いいたします。

神田さん

よろしく申し上げます。この後上江洲さんからケアセンターほみのお話をさせていただくという流れだったのですが、急遽、私の方からお願いをして、せっかくナツミさんから第2世代とうことでお話をいただき、上江洲さんは第1世代として、第2世代のお子さん育てられている母親でもあるということで、是非皆さんにも聞いていただけたらと思いました。少し予定していた順番を変更しますが、上江洲さんから、第1世代という立場から今のナツミさんの話を受けてどう思ったかお話していただければと思います。

上江洲さん

すごく良いお話だったと思います。私は20歳になる前に、働きに来ました。もう20歳に近かったから勉強じゃなくて仕事をしに来た立場であって、日本で働いて結婚して子どもが産まれて、いま高3高2中3の3人の子どもを、働きながら育てています。だいたい30年前、いま上のお姉ちゃんは大学を目指していますが、ナツミさんの当時の時だったらすごく苦勞していたと思います。今の方が全然楽し、日本人も外国人の子どもとか外国人に慣れてきました。当時は誰も慣れていなかったし、来た外国人の方も言葉、法律、文化、社会のルールも分からず働きに来ただけだったからなおさらです。30年経って今は文化も分かるし日本語も分かるようになって日本を住み慣れている国として見ているから、うちの子はだいぶ楽です。例えば保見のこどもたちは半分以上ブラジル人だから日本の中、豊田の中にある一つのブラジルの地域みたいな考え方をするけれど、うちの子は保見に住んでいないから日本人の中にいる外国人、日本で産まれたペルー人だけどこまで辛くはないと思います。

神田さん

色んな第2世代の子がいて、日本に来た時期、その子がいる環境、通っている学校もそれぞれ異なりますよね。

上江洲さん

そうですね。バブルの終わり頃の話になるのですが、今だとインターネットとかSNSがあり、色んな情報がありますが（それらが無く）、さらに今はスーパーでブラジル、アメリカ、韓国など色んな食べ物を見ますが、その当時は日本料理しかありませんでした。日本もすごくワイドになったと思います。本当に何もなくて、向こうの食べ物が食べたかったら誰か半年後に来る従兄弟とかが持ってくるかということをしなければならなかったです。今は私たちも楽になったし、その子どもも楽だと思いますが、その当時はとても辛かったと思います。ナツミさんは小さい頃お父さんお母さ

んは日本語が分からなくて、お父さんお母さんが病気になったら自分が病院に連れて行ったりとか、子どもがやることではないと思ったのですが、当時は誰も日本語が分からなくて通訳もいなくて大人が聞くべきで、子どもとして聞くべき話ではない話を医者から聞かなければいけないという状況がありました。最初出稼ぎに来てから日本もこの30年間でだいぶ変わりました。今もいじめはあるけれどそれは日本人同士でもあることで、その当時は外国人の子どものいじめがやはりありました。外国人だから廊下で勉強しなさいとかはとても辛いことだったと思うけれど、それは今では無いと思います。保見でも教育に力を入れていて、日本語とか文化とか宿題の手伝いとか色々な支援があって、子供たちは前より高校を卒業する子どもが圧倒的に多くなったし、小学校や中学校で諦めて仕事やバイトをする人が減り、こどもたちの多くはせめて高校までは目指しているし、大学に行く子どももすごく増えています。

神田さん

少しずつ変化して来ているけれども、その変化を作ってきた人たちはほんとに大変な思いをしてきたし、今もその努力は続いているから大変なんですよ。

ナツミさん

そうですね。やっぱり私の親が苦勞してきたこともあって、私の親が苦勞したからこそ今の私がいるのもあるし、私の親が苦勞したことは私が想像できないくらいのことだったと思うのもっと大変だったと思います。

神田さん

ありがとうございます。では、ケアセンターほみのお話、上江洲さん、よろしくお願ひします。

上江洲さん

はい。私は今52歳になり、20歳の頃に日本に来たので日本にいる期間の方が長いです。日本に来る前にアメリカで1年間勉強したいと思いましたが、1人で行って1人で向こうで暮らすのはすごく怖くて大変だったから、日本にいた叔母さん達に誘われて日本に来てみてそのまま30年以上日本で生活し、日本に住み慣れています。1990年日本の子孫のための移民法が改正された直後に来日しました。ペルーで生まれ、母方は沖縄の人の子孫です。日本に来てしばらくは沖縄で母や親戚と過ごし、数ヶ月後に静岡の自動車部品工場で働き、数年後にまた沖縄に戻り、ファーストフード店で働きながら日本語を少し勉強することが出来ました。その後愛知県の豊田市へ行き、トヨタ自動車の数ある工場の中のひとつに就職し、22歳から働いていました。結婚し、3人の子どもを授かり、産休が終わり仕事に戻りたいと思ったとき、2008年の経済危機で長く勤めていた会社に戻れず、誰もが経験した経済危機のため就職は難しく、ハローワークの講座の中から唯一興味があった介護コースを選び朝から晩まで勉強しました。コースにいる外国人のほとんどが日常生活に使っている日本語を話すのが大変でしたし、始めは専門用語も理解できず、もちろん読み書きに苦勞しました。講座の

最後に愛知県高齢者生活協同組合から愛知県豊田市の保見地域で日本語介護事業所を立ち上げると打診を受けたのがこの保見の始まりでした。介護事業所ケアセンターほみの開設直後は利用者の経験も無い不安な状態から始まり、少しずつ介護の必要のある利用者さんが分かってきて、様々な理由で法律や受けられるサービスの内容も知らない、主に保見団地に住む外国人の方が増えてきました。時が経ち、管理者やソーシャルワーカーが彼らと一緒に働くようになるとさらに多くの介護の必要な方が集まってきました。時間が経ち地域の人たちが私たちのことを知ってくれるようになり、外国人だけでなく日本人の利用者さんが増えていきました。私たちは外国人も日本人のスタッフもいる唯一の介護所で、様々な国籍の利用者さんに異なる言語でケアを提供し経験を積み急速に成長しました。訪問介護サービスをスタートし、5年後に障がい児ディサービスの開設をして、当初より12年が経ちました。愛知県高齢者生活協同組合で働き始めた当初は、協同組合というものがどういうものなのか、母国に協同組合があったから知ってはいましたが、生活協同組合とか労働協同組合の違いなどは全体的に良くわかりませんでした。いくつかの展示会・研修会に参加し、協同組合の全体像と仕組みを少し理解することが出来ました。特に最近は予想外の出来事が多く、この働き方を信じていることに気づかされます。今ではケアセンターほみで働く人たち全員に、例えば毎月ヘルパー会議があり、その月にあったことを話し、利用者の状態を説明し、共通の利益のためにみんなで働いていることを明確に説明出来るようになりました。ケアセンターほみで発生する利益、損失、変化、定義の把握をし、改善しようと思えば目的達成のために何をしなければならないのか、目標は共通であり、事業が安定し福利厚生があれば働く人もみんなが豊かになることを認識させることです。ケアセンターほみの従業員はみんな、これまで働いてきた所(工場)はオーナーが1人しかおらず、お金は1部の人にしか行き渡らないことを知っています。そこで自分たちは努力しみんな同じ方向に進めば、利益はみんなに行き渡ることを知っています。これこそが協同組合の仕事だと思います。保見の介護講座は始めて以来様々な国籍—日本、ブラジル、ペルー、ボリビア、エクアドル、中国、リトアニア、フィリピン、ネパールなどの123人以上の介護士が卒業しました。ケアセンター保見の介護士の9割が私たちの卒業生です。コロナの影響で1年講座は中止していましたが、需要に応じて1年間で2回開く予定です。長年この保見地区で仕事をしてきた中で地域の様々なニーズを実感し、ボランティアの方と日本語教室や交流などの手助けを行ってきました。食料品の配布の際の施設を貸し出しなどの手伝いも行っています。それにより地域の繋がりができ、仕事の評価にも通ずることとなりました。私は(講習を)卒業した人により多くの仕事の機会を提供したいと考えています。今後もこの地域に住む人たちと共に活動を続け、みんなが安心して暮らし働くことのできるより良い場所にしていきたいと思っています。

神田さん

次のスライドからは写真を見ながら上江洲さんに説明していただきたいと思いません。

上江洲さん

ケアセンターほみができたのはリーマンショック、バブルの1990年前後の時にたくさん仕事があって出稼ぎで来た人たち、南米から来た人たちが、当時みんなは3-5年間で自分の国に帰ると思っていたんですけど、結局30年経ってもそれができなくて、というか帰るより奥さん、子供たちとか家族を連れてきていて日本での生活が始まっており、会社、工場で働いていたのがリーマンショックの時にその仕事が無くなってしまって、みんな、特に下請けで働いている保見のひとたちは仕事が無くなってしまい、その一家も仕事が無くなって今まで受けたことがない生活保護だとか色々な支援を使って生活するようになり、仕事がない中で仕事を興そうという話が出たことからです。保見ではたくさん外国人が仕事が無いから、そこで外国人のためになにか支援したい、支援できれば良いなと考えてハローワークで募集をかけて私が申し込みをしました。パソコンとかエステとか通訳とか介護とか色々な講座がありました。そこで私が興味があったのが介護です。当時日本人と外国人が半分半分の講座で、10名の外国人と10名の日本人がいました。長机に外国人と日本人がペアになって座り、手伝いながら、聞きながら文化とかを一緒になって勉強することが一期生はできて卒業しました。そこが終わって、じゃあ勉強したことは良いんですけど、これからどうしようとなり、介護事業所を立ち上げるようになって1年かけて準備しました。最初は日本人、ブラジル人、ペルー人の3人でメインになって、まだ講座を続けたいといけなから日本人が1人講座のメインとなり、ブラジル人は通訳の方に入りました。私(ペルー人)は介護に興味があったからもう1つの守山の事業所に行って半年毎日訪問ヘルプで経験を積んで、半年後訪問介護事業所ケアセンターほみがオープンすることになりました。そこから最初の利用者さんへと繋げていくのですが、最初はもちろん誰からも信頼もないんですね。日本人は外国人にお母さんの介護をしてほしいとか誰も言わないし怖いんですけど、最初はこっちも経験が無いから怖い。だから少しずつゆっくり進んでいくことしかできませんでした。例えば、「お友達のお母さんが本当に困っているから助けてください。」とかがきっかけとなっていくわけです。その当時は介護制度を外国人は何も知らないから、私も勉強したばかりだけど分かることを教えてあげたりとか、先生に聞いたりとかこの人はどう対処して、とか工夫して。一番最初に出来た利用者さんはターミナルケア、もう余命3ヶ月だと言われていた人でした。誰も介護保険の制度、あるにはあるんですけど、制度も分からないし介護を受けられるとも思っていないし、それが初めての利用者さんで、一番に病院に連れて行って「あと3ヶ月だよ」と言われ、ほみにも伝えないといけなから娘や息子にも伝えないといけなから、ケアセンターほみは最初から難しいターミナルケアから始まりました。それから3ヶ月過ぎてそのお友達のお友達から、このおばあちゃんが最期に亡くなってから、介護されていた際に電動ベッドを借りることになったとかヘルパーも入ることになったとか地域の方がその様子を見て、次の利用者さんに繋がっていきました。こうして近い人たちから訪問介護は始まり、今話している利用者さんはみんな外国人の高齢者の方でした。そしてそのうちに保見の地域とか豊田の方の普通の日本人のケアマネジャーさんとか日本人の相談員を集めることが出来ました。その結果団地の日本人の障がい者、高齢者の利用者が増えていきました。最初は請けたいばかりだ

からなんでも「やります」という感じでした。今思えば他の事業所だったら請けなかったかもしれないケースもあって、今になってそれが難しかったというか問題があるケースだと思うかもしれないけれど、当時は介護したいと言う思いでいっぱいなばかりでした。そうしているうちに難しくてもケアセンターほみだったらやってくれるというお話ができて、日本人のケアマネジャーや日本人の相談員から信頼され、外国人だけではなく日本人の利用者さんが増えていきました。訪問介護の世界では1ヶ月に何時間のヘルプ時間があるかを見ます。その当時は1ヶ月50時間だったのですが、今では800時間の介護時間にまで増えてうれしいことです。6年後には訪問介護も安定してきたし周りにも知られるようになって、自分たちも経験を積んで自信がつかしました。

そこで次のステップへいこうという話になりました。高齢者のデイサービスで、うちは愛知県高齢者生活協同組合ですけれど、私たちの地域では10何年前、その当時は日本人の高齢者はいたかもしれないけどブラジル人の高齢者はまだ働いていたんですね。30年前にきた人たちが現在は70歳とか75歳とか80歳で若い人は50歳とかなのでまだこれからニーズがあるんですけど、その当時今増えてるかわからないけど例えば日本で産まれた障がいをもつ子どもが、両親が離婚して母子家庭だったりすると親は若い人でも働かないと食べていけないため、その子供たちを預ける所は保見の近くでは無いからと、始めたのは放課後等デイサービスです。保護者が働いている間に学校に迎えに行き、ほみに連れてきてほみを見て6-7時になったら家につれて行きます。それが6年前です。今は6年前当時小学生とか中学生だったのがこれまで何人も卒業してきたんですけど、来年の3月にはまとめて5人卒業していくから、その人達の保護者のニーズに合わせて、小さいときから見ていたのに卒業したら会えなくなるから、予定では1-3月に生活介護をして子供も卒業するんだけど引き続き障がいを持った大人のデイサービスにチャレンジします。放課後等デイサービス+生活介護+〇〇介護。それでこれから、例えば団地でも、30年前は若かったけど今は70代で、今後のニーズに合わせてこれから先の地域定着型デイサービスを考えています。ありがとうございます。これがケアセンターほみです。

上江洲さん

これはコロナの時に、集会場で前やっていた日本語教室はコロナだから貸すことができなくて、ケアセンターほみは土日空いていたから是非使ってくださいと言うことで大学生のボランティアさんたちが日本語をほみの子達に教えてあげたり、ゴミを拾ったり、週1回、地域の子どもがそこで日本語を学ぶということをやっていました。そして今、コロナも落ち着いたところで集会場に戻りました。

神田さん

今ちょうど写っている、前に立っている女の子は愛知県立大学の卒業生です。

上江洲さん

若者が一生懸命ボランティアを頑張ってるし日本語を教えているから、イベントで

ケアセンターほみは子供たちとそのボランティアのカレーライスを作ったりしてもてなしました。

神田さん

このとき子どもたちが上江洲さんに「どうして自分たちにこんなにやさしくしてくれるの？」と聞いてきた時の話が印象的なので、ぜひお話してください。

上江洲さん

ケアセンターほみが目指しているのは区別しないこと。身体障がい、知的障がい、言葉、貧困、年齢も。スタッフも一番上は79歳、最年少は高校卒業したばかりの日本人の女の子です。その間、40, 50代もいます。区別無く、みんなが住めるところにしたい。それで、なんで利用者でもない私たちに場所を提供してくれて土曜日に開けて日本語を学んで良いとかしてくれるのかということに対しては、私たちはこの地域で働かせてもらっているから、地域に恩返ししたい。私はペルーで生まれたけど、この子達は保見で生まれたと言えるから、保見で生まれたことは恥ずかしくないと思ってもらいたい。

私の時から今までで13期で、123人のヘルパーさんがそこで卒業しました。そのままケアセンターほみで働く人もいれば、色んなところで働いています。

上江洲さん

これは自炊しています。訪問ヘルパーは料理しないといけないときもあるから、日本料理も習わないといけません。今は分からないことがあればすぐ事務所に電話して事務所ですぐ解決することができます。

上江洲さん

祭りでペルー料理を出したりもしました。エプロンをしている人はみんなうちのスタッフです。地域の方は100人以上来てました。

上江洲さん

1ヶ月に1回土曜日朝、おじいちゃんおばあちゃんお父さんお母さんに子どもがモーニングを作って出しました。保見に住んでる、ブラジルの子が多いです。80%くらい。

上江洲さん

最年長のスタッフです。とても良い笑顔です。
ありがとうございました。

神田すみれ 「多文化社会の共同の視点 ～支援の立場から～」

よろしくお願ひします。神田すみれと申します。

金城さんと上江洲さんのお二人から経験に基づいた強いメッセージをいただきました。普段からお二人とは、時々お会いして、たくさんのお話を教えていただいています。今から話をすることは、お二人から教えていただいたことや、地域に暮らすたくさんの方たちから教えていただいたことを、どのようにしたらもっと変化へと繋げていくことができるのかを私なりに考えたことです。

「同胞（男性）の皆さん、私たちの首を踏みつけている、その足をどけてください」。という有名な言葉があります。19世紀の米国で女性参政権運動家として活動したサラ・グリムケの言葉を、アメリカの弁護士であるルースベイダー・キンズバークさんが女性の権利をめぐる裁判の中で引用して広まった言葉です。

私たちの首を踏みつけているその足をどけて。その足をどけてくれれば、私たちは本来持っている力を活かして、社会に参画することができる。

一人で「足をどけてください」と言うと、逆に踏みつぶされてしまう、というのが今の現状ではないでしょうか。なかなか「足をどかしてください」と言うことすら難しいという現状があります。

金城さんは先ほど「声があげられない」とおっしゃいました。国籍条項をはじめとする、さまざまなこと、社会の仕組みや構造、制度や法律など、旧体制のものが長年そのままになって残っています。いつできた制度や法律なのだろうとびっくりするようなものがずっとそのまま残っています。おそらくそのような制度や法律が作られたころは、同質性が高く、人権意識が低かった時代だったと思います。

現在、多様性が高まり、包摂、人の尊厳を尊重することが大切であるという価値観が広まりつつある時代でも、従来の仕組みや慣習がそのまま残っています。それらをやめてください、制度や法律を変えてください、ということがどうしてこんなに難しいのか。なかなか変化をもたらすことができません。皆さんの中にも、国籍条項がこんなにあるということを知らなかった方は多かったのではないかと思います。もっと多くの方がこのような現実を知ることが大事です。

今日は私は支援の立場から、ということで話をしています。支援者というイメージが皆さんどういうイメージを持たれているのか分かりませんが、「すみれさん優しいからたくさんやってあげるかもしれないけど、そんなにやってあげたらその人をだめにしちゃおうよ」ということを言われることがあります。つい最近も言われました。そのようなことを言われるとモヤッとします。私は、優しいから支援をしているのではありません。当たり前なことが当たり前になっていない。それをなんとかしたいという怒りにも近い思いで支援をしています。先ほどの表現を借りると、足で踏みつけら

れている、その足をどけてほしい。蓋をされ、その上に重しをのせられて、出口をふさがれている。出口を開きさえすれば、その人は当たり前前にその人自身が元々持っている力で、その人が望む人生を送ることができます。私は、出口を開けたいだけ。その足をどけたい、蓋を開けたい、重しを取り除きたい。当たり前のことが当たり前になっていないことが悔しく、時には腹立たしく思うのです。場合によっては蓋をされその上に重しを乗せられている人を前にして、私自身が苦しくなってしまうたり、居心地が悪くなってしまうたりします。

みなさん、もし隣の人がお腹空いたと言っているのに、自分だけがおいしい物を食べていたら、居心地が悪くないですか。隣の人と一緒に美味しいものを食べたいと思いませんか。そのような思いで、支援と言われることを20年ほど続けてきました。

しかし、どれだけ一緒に食べましょうと言って、蓋や重しを取り除こうとして一緒に頑張ってみても、それは、その場しのぎにしかならず、結局、足はどかしてはもらえないのです。その人がどれだけ頑張っても、一見その場はなんとか切り抜けられたように見えても、また元に戻ってしまうのです。それをずっと繰り返してきました。1つの問題が解決しても、すぐにまた同じ問題が現れ、同じ課題を抱えている人に出会う。その人の課題を解決して、ありがとうと感謝され、その人は日常に戻ったように見える。しかし、またかなりの確率で、数年が経過すると、またこんな問題が起きて困っていると同じ人から相談があります。1人の人の課題を解決しても、同じ課題を抱える別の人に出会います。それを10年、20年と繰り返していくなかで、私自身も疲弊していきました。社会の仕組みや制度、構造が変わらなければ、問題は変わらない。けれども社会の構造を変えるような力は自分にはない。

そんなことを考える中で、先ほど上江洲さんが話してくださった「協同」という考え方に会いました。社会の大きな構造は変えられないかもしれませんが、私たち一人ひとりが自分で、自分の日常をコントロールする力をきちんと持つことができれば、それが奪われてしまったときに、それを取り戻すことはできる。その手助けをすることで、その人と、社会との関係性を高めていくこと、それがその人のいる組織、その人がいる地域を支えあう力を高めていくことに繋がっていくということに気が付いたんですね。それは、上江洲さんやケアセンターほみの人たちに教えていただいたことでもあります。

問題を生み出している社会的な大きな構造は変えられないけれど、その人の日常を取り戻し、その日常を支えていくことを継続していくと、自然と地域の人達と繋がっていったり、そこで支えあったり、助け合ったりすることが生まれてきます。

先ほど上江洲さんが「地域のために」という表現を使われましたが、今、保見では地域の中から、そのような力がどんどん生まれてきていると感じています。でも、そこまで来るのには20年も30年もかかっている、地域の人たちが少しずつ、つくってきたものだと思います。

私自身は約20年ほど、東海地域に暮らす海外から来ている人たちや、第二世代の人たちとの関わりがありますが、この2年間はウクライナ避難民やアフガニスタン退避者のように、緊急的に日本へ避難してきた方たちとの関わりが増えています。コロナのパンデミックの時にも海外出身の人たちと、緊急的に関わりがありました。もちろんパンデミックの影響を受けて困難な状況に陥った人と、戦争や紛争で避難してきた人たちとは、背景も置かれている状況も全く異なります。しかし、緊急性があり、突然困難な状況に陥ったという点では共通しています。そのような危機的な状況に置かれてしまった人たちが、自分自身で、自分の日常をコントロールしなごら、自身の日常を取り戻すというのはどういうことか。そう考えるときに「協同」というのは一つの方法なのだと思います。それは、困難な状況の中でも自分自身の力を取り戻していくというプロセスです。

ウクライナの人たちは、戦争が終わったら帰国したいという人もいますが、今後日本でずっと暮らしていきたいという人も少なくありません。そう考えたとき、安定した収入を得ることができ、且つ自身のこれまでのキャリアや経験、専門性を活かした仕事に就きたいということは自然なことです。けれどもなかなかそのような仕事は見つかりません。

そして、アフガニスタン退避者の方達は愛知県に150人くらいいます。2021年にアフガニスタンでタリバンが復権してから、愛知県に避難してきた人たちです。どの人も、たくさんの相談事がありますが、共通していることも多くあります。まずは住居の問題がありました。例えば、日本では、住むところを借りると、電気もガスも何もあります。まずは家電を揃え、真冬には、カーペットやストーブが必要になりました。その後は仕事です。

そして子どもたちの教育のことがあります。難民として緊急的に日本に逃れてきて、日本語はもちろん、日本の教育制度も分からない中で、どうしたら子どもたちの教育を保証できるかということも、保護者、親たちが抱えている共通の課題です。これらを一一つ、一緒に進めていきます。まず一人の人の仕事はなんとか見つかったら、また別の次の人に仕事を探さなければいけない。なぜ仕事が見つからないのか。やはり日本社会の中で、難民に対するイメージや出身国に対するイメージ、そして日本語ができない人は雇用できないという先入観が根強くあります。その人が持っている経験やスキル、人柄を活かすような雇用は、なかなか実現しない。これはこの人たちの努力が足りないのではなく、ホスト社会である日本社会が抱える課題です。そして移民や難民が抱える世界共通の課題でもあります。それをどう変えていくことができるか。私たち市民は、社会構造を変えることはできませんが、同じ課題を抱える人が集まり、どうしたら自分たちの課題を解決することができるかと協同で力を合わせて、解決に向けて動くことは可能です。

そのような考えから、アフガニスタン退避者の方達に、個別に持つ自分たちの課題

をコミュニティ内で共有し、それを日本社会にアプローチして課題解決のための支援を呼びかけてはどうか、と提案しました。すると早速やってみようとなりました。今は、そのプロセスの途中ではありますが、共通の課題とか、共通の目的を持つ人たちが力を合わせて助け合う、それが「協同」だと思います。危機的な状況に直面しているとき、例えば一人ひとりとは多様で異なっていますが、同じ課題を抱え、それを解決するという共通点で、私たちは繋がることができます。一緒に力を合わせて、共通のニーズを叶えるために手を結ぶことができます。これは、リーマンショックの後に、保見の皆さんの経験から教えていただいたことでもあります。先ほど、上江洲さんから、多様な文化背景をもつ人たちが一緒に研修を受けて、一緒に仕事に繋げていくことをされていると教えていただきました。一人ひとりとは多様ですが、同じ課題を共有して、それをどうしたら解決できるかと繋がる時に、とても大きな力が生まれるのだと思います。高齢者生活協同組合が提供した職業訓練で、リーマンショックで職を失った多様な文化背景をもつ人たちが、自分たちの課題を解決するために一緒に事業所を作る、自分たちで仕事を起こしていったんですね。自分たちは仕事を失った。けれども、仕事を失った自分たちが、自分たちが働くために仕事を作ればいいのか、みたいなことで事業所を立ち上げたわけです。

「きょうどう」には、協力するに同じと書いて「協同」という言葉の他に、共に同じと書いて「共同」とか、協力して働くと書いて「協働」という言葉があります。「協同」の意味を確認すると「目的や利益の一致している複数の人達が心と力を合わせて助け合って物事を行うということ」とされています。一人や二人ではなくて、複数であることが鍵なのですね。そして「心」と「力」を合わせるとされていて「心」を合わせるとということが鍵なのですね。「複数の人達が心と力を合わせて助け合って物事を行うということ」を協同」という。

みんなと一緒にやって、みんなと一緒に決めて、みんなと一緒に分け合う。それは一人一人がもともと持っていた力を出し合わなければ、皆と一緒に運営したり物事を決めたり、分け合ったりということはできないですね。例えば一人だけ自分ではできないからと言って、力を出すのをやめてしまったり、一人だけ蓋をされて、その人が持っている力を出すことができなかつたら、一緒に決めて一緒に分け合うということとは実現しないわけです。協同という仕組みはよくできていると思います。一人ひとりが持っている力が、十分に発揮され、それらが合わさり一緒になったとき、少しずつじわじわと社会や地域、ひいては大きな構造的な仕組みを変えていく力になっていくのだと思います。

先ほどの話で、金城さんが経験されたことについて、十数年の間にも変化は起きている、でも何も変わっていないところもある、という話がありました。変化は、当事者の人達、一緒に関わってきた人たちの力が合わさって変化を起こしてきた、というところも大きいと思います。それは一人や二人の力では成しえなかったことを、多くの人たちが力を合わせて変えてきた。けれども、まだまだ、変わらず今も、ということもたくさんあります。それを、どう変えていけるのか、ということ先ほど休憩の

間に金城さんと話していました。地域や社会の仕組みをどうしたら私たちが変えていけるのか。変えていくということは、劇的な力技で進めるのではなく、やはり、上江洲さんがお話をくださったこと、そこからの学びが大きい。こういうふうには人の力が合わさって、地域とか仕組みって変わっていくんだと、実践からそれを教えてくださいました。上江洲さんが、よりよい地域を作っていきたい、とおっしゃっていました。上江洲さんたちの取り組みが変化をもたらしている。それを教えていただきました。

協同組合についてですが「高齢者生活協同組合」も協同組合です。さきほど、上江洲さんのお話の中に「労働者協同組合」も出てきました。協同組合の定義ですが、協同組合とは「共同で所有をして、民主的に管理をする事業体を通じて、共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いを満たすために、自発的に自ら望んで手を結んだ人たちの自治的な組織」となっています。事業体であることが協同組合ですが、それが地域の中で、社会の中で、協同組合的な動きや実践が生まれていくと良いのかなと思っています。

世界には、移民、日本では外国人と言いますが、移民が作った協同組合の取り組みがいくつかあります。よく知られている3つの事例を紹介します。一つはアメリカのニューヨークで中南米出身の人たちが作った UP&GO (アップ・アンド・ゴー) というハウスクリーニングの協同組合があるんですね。通常このようなハウスクリーニングという事業は、仲介業者が間に入って派遣で行われることが多いのですが、UP & GO は、自分たちで依頼主から直接依頼を受けて、報酬を直接受け取って、それを組織のみんなで分配するという仕組みになっています。中南米の移民女性が作った協同で働くという仕組みです。

もう一つが、スペインに暮らすアフリカ出身の難民や在留資格を持たない非正規滞在の人たちが作った協同組合です。TOP MANTA (トップ・マンタ) という協同組合です。在留資格がないアフリカ出身の人たちが、自分たちの出身地域のアフリカの伝統的なデザインを活かしたアフリカ風のデザインのファッションブランドを立ち上げたんですね。Tシャツや服をデザインしてそれを販売するという事業です。自分たちで事業を運営し、自分たちを雇用するのです。雇用され、就労しているということで在留資格が下ります。非正規滞在者が在留資格を得て正規の滞在者になれる。スペインは在留資格制度が日本とは違うので、日本で同じことをしても同じようにはなりません。スペインにはそんな協同組合があります。

もう1つ、私が2015年に訪問したオーストラリアのニューサウスウェールズ州にあるエスニック・コミュニティ・サービス協同組合(Ethnic Community Service Cooperative)を紹介します。1978年に7つのエスニックコミュニティと一緒に設立したコミュニティベースの協同組合です。移民の人たちが文化的言語的に適切な子育て支援サービスを受けられるようにということで設立されたそうです。最初は子どもを育てる移民の親たちが、親戚がいなかったり、頼れる実家がないため、自分ですっと子

どもを見なければいけない。けれどもそれでは親が働くことができない、疲弊してしまうというので、自分たちで協同組合を作って、子どもを預ける、預かるという事業を始めたそうです。子どもを預かり、親が働いたり、自分の時間を持つことができるような工夫をしたところから事業所が始まったんですね。その後、国の高齢者介護制度の中で、移民の高齢者の訪問看護の事業も行なっています。

2015年私が訪問した当時、子ども、障がい者、高齢者を対象とした福祉事業を行なっていて、自身も移民であるスタッフ（29人が常勤職員、400人がパート職員）が110の言語で対応していました。職員は全員移民なんですね。出身国も違うので母語も違う、話せる言語も文化もアイデンティティも違うということで、依頼があると、依頼をした人と同じ背景、出身の人が訪問する。母語、母文化で訪問看護のサービスが受けられるという協同組合です。ケアセンターほみでもとても近い取り組みをしていますね。世界には移民による協同組合はたくさんできてきていますが、日本には移民の協同組合の実践はまだまだ少ないです。協同組合は共通のニーズと願いを通じて、コミュニティを作っていくってことができます。様々な社会的課題を解決する方法の1つだと思います。

2016年に協同組合の思想と実践がユネスコの無形文化遺産に登録されました。現代の社会に必要な概念だと思います。エスニシティ、民族、国籍、年齢に限らず、多様な市民一人ひとりが尊重されて、必要な配慮がなされて、繋がり支えあうことができる社会。そんな社会を目指したいですし、それを保障する制度や仕組みを作っていく必要があると思います。

このあと、金城さん、上江洲さんと話をしながら、参加者の皆さんからいただいた質問を聞いていけたらと思います。

質疑応答—日本で暮らす南米にルーツをもつ人の現在から次世代へ

神田さん

よろしくお願ひします。たくさん質問いただきましてありがとうございます。私のほうでまとめながらお二人に答えていただくという形で進めていきます。まず、金城さんのお話の中で、国によって障がいの捉え方や受け止め方が違うという話がありましたが、具体的には国によってどんな風に違いますか？ もしよければペルーとブラジルとそれぞれどんなふうか教えてください。

金城さん

国によって違うという話をスライドのほうでさせていただいたんですけど、私が関わってきた子どもたちはメインはブラジルとフィリピンの子ども達でした。ブラジルの子達は、同じ言葉が通じるからといいですか、自分として保護者に説明がしやすかったというのがありますし、保護者の質問にもすべて答えられやすかったといいですか。例えば「自閉症って何ですか」と聞かれたときに、同じ言語で話す保護者も安心するということももちろんありますし。今ブラジルでも自閉症とか多動とかに対して、保護者が声をあげたりとか、SNS上で声をあげて情報発信するというのがあるんですけど。例えばフィリピンの方、その人だけかもしれないんですけど。私が関わった家族に関してはフィリピンでも、お金持ち・裕福な家庭の人はセラピーに連れて行ったりとかできるんですけども、あんまり裕福ではない人たちはセラピーすら連れていけないし。自閉症って何ですかと聞かれても、私は日本語でしか答えることができないので、納得した回答を、保護者が納得した状態で帰れないということがあったので、ちゃんと言葉でその人が納得できる説明ができるというところでの、理解の仕方が違うというか、そういう意味で書かせていただきました。

上江洲さん

私の経験では、例えば、ブラジル人のほうが情報が多いから、入れられる。フィリピンの方が少ないんですけど、ブラジルでもペルーでもフィリピンでも、障がい者への制度はないんですね。だからそれで、フィリピンの人でも、例えばお金を持っている人しかセラピーは受けられない、というのは、国からの考え方だと思うんですけど、日本では外国人の子どもでも日本人の子ども、同じリハビリとか同じセラピーだとか、色んな制度は同じに使えますと思います。ただそれを、どうやって伝えるかとか、それが難しかったかもしれない。でも日本ではみんな同じように受けれるんですね。

神田さん

ありがとうございます。質問は障がいについてでしたが、介護保険制度も同じようなことがありますか。上江洲さんどうですか？説明とか理解とか介護の概念の違いとか。

上江洲さん

例えばペルーでは介護保険の制度がありません。だから、民間の施設だとか、国の

施設だと、とてもボロくて誰も受けれないとか、ホームレスの人しか行かないところで。まあまあ良いところは、民間で、お金たくさん払うと入れるんです。今はちょっと変わってきているかもしれないんですけど、前だと昭和のころを考えるといい。昭和は自分たちで、お母さんが、おじいちゃんを見る。自分たちの家の中で見る。まだ向こうはそんな考え方。最後は、お金が本当にある人、余裕ある人は、施設だとかにお金払って、それはお手伝いさんつけて、面倒を見る。日本みたいに平等にみんなを受け入れるは、ないですね。まだ、介護保険制度がない。プライベートだったらあるかもしれないけど、国民ではない。

神田さん

説明するときに難しいとか、理解してもらおうときに難しいとか、どうやって工夫されていますか？

上江洲さん

それが例えば、私たち大学生や先生じゃないから。私たち本当にヘルパーですね。自分の家の家事とか子育てとか介護やってる人たち。それが、一番最初に困ってたのは、例えば、日本だと介護制度、ヘルパーはプロフェッショナルとして家に入って、それで必要なもの、生きるために必要なことしかしない。外国人の利用者さんは、それが分からなくて、お手伝いさんだと思っている。お手伝いさんだと、例えば、介護保険でできる云々とか、それ以外のことはできません。それでも求めてくる、それで困ったときもあります。そのような時は、日本人のヘルパーがいい。日本人には言わない。同じ国のヘルパーには、同じ国の言葉でガンガン言えるけど。今のヘルパーで10年とか12年の経験がある人は、日本人の所がいい。そこまで例えば時間で記録書いてくださいとか、これ以上は求めない。ただ、新しい利用者さんは、例えば換気扇の掃除とか、先に料理作ってほしいとか、全然、とんでもない。だから最初から、これはできないですよ、それで一回やったらおしまい。生きるためのお手伝いをしますけど、支援もしますけど、これ以上はできない。それでもというか、だめと思ったら、やってあげる。

金城さん

やっぱりブラジルは、介護保険制度もちろん存在しないし、ヘルパーというか、家政婦さんのイメージが強い。ベビーシッターが家政婦さんと一緒にして、子どもの面倒を見るのと同じように、ヘルパーの勉強、コース、講座を受けた人が、家政婦さんのお仕事もするのが当たり前になっているので。やっぱりその違いを理解してもらうには、国の風習も関わってくるのかな、と思います。

神田さん

ありがとうございます。もう1つ高齢者についてです。外国人の高齢者が、日本人の高齢者と同じように困ることがあります。そして、外国にルーツがあるから、外国背景にあるから困ることがあります。それぞれどのようなのでしょうか。上江洲さんに質

問です。

上江洲さん

人間は高齢者になる。言葉は違うかもしれないとか、文化は違うかもしれないけど。みんな、どんどん高齢者になっていくと、自分でこれまで好きだったこと、子どもの時に、お母さんと、お父さんと、学校で食べたものとか。みんな求めていく、戻る。子どもに戻っていく。ペルー人でも、日本人でも、お母さんと食べたものを食べたい。色んな国の高齢者を見てるんだけど、同じですよ。最後は、昔食べたペルーの料理食べたい。昔食べたブラジルの豆食べたい。昔食べたお母さんの例えば肉じゃが食べたいとか。それが自分を育ててたんだから。それが、ペルー人とか日本人とかではなく、人間は同じ風に高齢者になっていく。

神田さん

逆に、日本人は困らないけれども、外国人だから困ることもありますか？

上江洲さん

例えば、ケアセンターほみでは、ブラジルのヘルパーとか、ペルーのヘルパーとか、フィリピンのヘルパーもいる。だとしても話聞いている。掃除しながらでも、話聞いてほしいとか、どうしてもフィリピン語が良いとか。その時、話だけど、だけど日本人だと大体、みんな一番は話を聞いてほしい。話しながら、掃除だとか、おむつ交換だとか、困ることを手伝ってほしい。みんな大体ほとんど、話を聞いてほしい、話し相手が欲しい。それだと自分の国の言葉が良いですね。それだったら、ケアセンターほみの利用者さんは、同じスペイン語、ポルトガル語で聞ける人がいる。他の事務所にはそれは無いかもしれない。

神田さん

話を聞いてほしいというのはみんな同じですが、自分の母語で話を聞いてくれる人はそんなにいない。そういうことですね。ありがとうございます。それからもう一つ、介護に関係することで、介護保険や医療保険や、年金で困っている人たち、困るケースはありますか。そういう人たちは多いですか、どのくらいの割合ですか？

上江洲さん

保見は外国人の高齢者が多くて、その30年前、35年前来た、出稼ぎで来た人たちは、派遣会社からで、会社に勤めてたんだから、社会保険とか、年金とかなくて。払わなくてもいけるかも、みんなその内に国に戻るんだろうと思っていた。例えば社会保険払ったら（時給）1200円、社会保険払わなかったら1400円。どっちを取るか。1400円を取る人の方が多かったんですね。最後にこの国で高齢者になるとも思わなかったんですね。もう30年が過ぎて、今70歳。定年になってもおかしくない、孫とゆっくりのんびり生活してもおかしくない。ただそれは年金を払ってないから、今になっても年金もないし、働かないと食べていけない。そして、介護保険を払って

なければ、介護は受けられない。現在の保見のこれからの課題でもあるんです。社会保険が義務になったのが30年前。それからはみんな保険を掛けているんですけど。例えば、30代で来た人で、今60か50(歳)。50から年金払って、そんなに全然もらえないけど、20年30年は払っていなかった。だから、弁当屋で働く。あそこに夕方とか、送迎のバスで。朝になると団地の人達を迎えに行って、それでお弁当屋に連れて行って、それで働いて戻ってくる。それはまた昔の昭和の時と似てますね。

神田さん

それは工場でお弁当を作る仕事をしているのですね。食品工場で働くために送迎バスにみんな乗っていくんですね。高齢の人達が…。

上江洲さん

そうです、そうですね。車、部品関係だったら、もう55とか60で働けない…。

神田さん

雇ってもらえないんですね。

上江洲さん

そう。重い物だとか。全部早くしないといけない。それがもう、お弁当だと、みんな食品とか慣れてるから、重い物も無いし、そんな大変じゃないから。みんな高齢になると弁当工場が人気。

神田さん

車の部品とかの工場で働く人は50代で仕事が無くなってしまう。

上江洲さん

若い人と一緒にできないから、会社側もダメとかいう。自分ももうついていけないから、疲れてしまうから、違うところで働く。

神田さん

ありがとうございます。金城さんも修士課程でブラジルの高齢者の人たちのことを研究されていましたね。

金城さん

そうですね。上江洲さんがおっしゃった通り、昔30歳で来た、20代で来た人は、今60代、70代になっている中で、保険会社を通して働いていると、社会保険ではなくて、国民健康保険を払っていたので、年金はもちろん払っていないし。一部の人は、ブラジルの社会保障を、協定をブラジルと日本で結んでいる関係で、ブラジルで年金を払っていたものが、日本で受け取れたり。逆の方法で、ブラジルで高齢者となっていて、日本で払ってた分がブラジルで受け取れたりする協定があるので。そこが少し

助かるんですが、しかし、やはりその、皆さん帰ることが、ずっと頭にあったので、30年40年経った今でも帰れない人たちがほとんどで。家族と疎遠になってしまっただけ。私が研究対象にした人の中にも、脳梗塞と心筋梗塞を起こして、社会保険一切払っていませんでした。日本には20年以上住んでいて、倒れちゃって、職場で。独り身だったので、ご家族みんなブラジルにいて、お子様もみんなブラジルにいて、倒れて入院しないといけなくて、手術もしないといけない中で、ご家族が緊急で来日をされて、娘さんと息子さんが、逆に入院費用、手術費用、全部病院の医療費用を賄うために、息子さんと娘さんが日本に残って、工場働きながら借金を背負ってしまっただけ。その方はブラジルに帰った、というケースもあったので。やはり皆さん日本に残る中で、安定した生活ができるのかと言ったら、できないという社会問題もあれば、やはりその、自分たちはいつか帰るから、払う必要はないという頭もあるので、難しいところですね。

神田さん

ありがとうございます。もう一つ、今度は子どもの福祉の質問です。子どもたちのデイサービスに対して、公的な支援があるべきだと思いますが、現状はどうですか？

金城さん

日本は、やっぱりブラジルに比べたら、福祉は進んでいると思っていて。社会保障制度ももちろんそうですし、障がいに対しても、やはりその国が賄っているからこそ、日本人もブラジル人も、ペルー人もフィリピンも、みんな平等にサービスが受けられているんだと思うんですけど。なので、日本は国が保証している部分がたくさんある。例えば、放課後等デイサービスに通うにも、受給者証という手帳を取る必要があるんですが、保護者の負担は1割負担で済んで、残りの負担は行政からの補助金が入るから、安くサービスが受けられる、というシステムなんですね。なので、そこは日本はすごく進行していると思います。

上江洲さん

そうですね。例えば、障がいがあっても普通の人生、普通の健康な子どもと同じにしないといけない、というかしまししょう、と。ノーマライゼーション、それがすごくいいと思います。ペルーだったら、ダウン症の子どもは学校にはいけない。家で隠す。外には出たくない。見せたくない。日本では障がいがあっても、特別支援学校がある。普通の人生、みんなでノーマライゼーションをしようというのがすごいと思います。

神田さん

ありがとうございます。ここまで福祉の話をしてきましたが、少し話題を変えます。金城さんの話の中で、第1世代、第2世代、第3世代という話がありました。第1世代、第2世代、第3世代それぞれが抱える問題がありますが、どの世代も抱えている問題と、この世代だから抱えている問題があると思います。どうでしょうか。

金城さん

どの世代でも共通しているのが、日本語の壁はもちろんあるし、私からしたら国籍は壁です。それは、第1世代でも、第2世代でも、第3世代でも抱える課題だと思います。

神田さん

違いはありますか？第1世代はこの課題はあったけれど、第2世代はこれがないとか。第2世代が抱えている課題で、第1世代はこれはないとか。

金城さん

世代が違うので、やはり気持ちの問題は違うと思うんです。例えば、第1世代の親、私の保護者というのは、いつかブラジルに帰るといふ気持ちの方に入っているのです。差別を受けても、まだ我慢できるというか。我慢できない差別もあると思うんですよ。ただ、自分は外国人で、移民、移民という言い方はおかしいですけど、外国人として、いつかお金をためて、ブラジル、自分の国へ帰るといふ思いで来ているので、多少我慢できる。でも、私みたいに、日本で育っていて、日本人と同じように勉強をして、日本人と同じように、または日本人より少し苦勞をしてきた中で、あなたは外国籍だからできませんと言われると、はあ？となるんですよ。それは、我慢できるんですけど、我慢できないこともある。悔しいというか、だからと言って、帰化したらそれは良くなるかと言ったら、ならないんですよ。手続き上は、日本人になると思うんですけど、でも見た目もやっぱり、私はまだ日本人の顔をしているのでいいんですけど。日本人の顔をしていない第2世代の人だと、もっと大変だと思うし、もっと受け入れられないというところでは違いがあると思いますし。第3世代だと、ブラジルすら知らないのだから、あなたはブラジル人だからねと言われても、「そこどこ？」となるので、その違いはあると思います。

神田さん

ありがとうございます。では、第1世代の上江洲さんから。

上江洲さん

私の昭和と違う。ナツミちゃんは小さい時から、勉強だとか。私は大人になって、若い時に来た。だから、勉強とかではなく、働きに来たんですね。だから、お母さんお父さんとか、自分の経験なんですけど、外国人は外国人で。だけど、差別とかいじめは感じたことはない。最初は沖縄にいて、その後、愛知県にきた。トヨタの下請けで社宅に住んでいました。周りはみんな日本人でした。だから、日本語覚えたと思う。みんな年寄りが多くて、私が一番若かったんですけど。周りはペルー人とかブラジル人いなくて、日本語覚えないと、住みよくなれないというか、仕事にならない。日本語分からない、だからそれで休憩の時に勉強していた。その努力を見て、日本人が、社会保険だとか、正社員として雇ってくれたし。それで、結婚して、子どもができて、

リーマンショックになって。それで、また違う人生。会社じゃない人生、介護人生。自分の力だと思うんですけど、それで勉強して勉強して。だからいじめ、外国人なのわかっている。向こうの目も、外国人ですよ、あの人は外国人って分かっているんだけど。差別とか、いじめ感じたこと無いと思う。そんな悔しいとかないです。一生懸命頑張れば、頑張る姿見てくれれば、支えてくれたんですよ。それが幸せですね。自分の子達は、例えば、みんな同じところ集まっているんだったら、保見みたいな、それでまた感じると思うんですけど。私の子たちは、日本人の中に囲まれている。自分たちはペルー人と言うんですけど、結局考え方とか全部日本人と同じ。あの子たちまた辛い目に合うかもしれない。気を付けなければと思うんですけど、受けいれてくれない人も出てくるんだろうし。仕事だとか勉強、これから大学とか目指しているから。色んな事あると思うんですけど、それはもう自分の力。自分の性格、出さないといけない。

神田さん

親子で、母親としてお子さんと外国人として日本にいること、ペルーのことについて話すことはありますか？

上江洲さん

自分たちはペルー人と言っている。私もペルー人で、ペルー人で介護の仕事だとか、日本人と仕事をしたりだとか。子どもはペルーには行ったことがないからペルーに行ったりだとか。子どもは、お友達の中でも自分たちは、ペルー人。わかっている。理解しています。理解した上で日本の暮らしがいいと言っている。

神田さん

上江洲さんが金城さんのお話をされた後に、日本社会がこの間、どんどん変わってきて、前に比べると楽になっていると思うとおっしゃっていました。どうして変わってきたのか。人の意識が変わったのか、国の政策が変わったのか。何が変わったと思いますか？ どうして変わる事ができたと思いますか？

上江洲さん

ナツミちゃんが一番最初、子どもの時に来た子どもだから一番つらいと思う。自分たちも連れて来ただけで、新しい国、新しい言葉、新しい文化、それで学校に行ってもいじめとか。子どもが一番だめですよ。何も考えずに、言うんですよ。だけどそれは出稼ぎで来た人たち。バブルの後、他の国から来る人には、みんな準備していなかったと思う。前だと、韓国とか中国の人がいたかもしれないですけど、何年後ですよ。普通の日本人の、普通の人達は準備をしていなかった。私たちも準備していなくて、それでも 30 年後、35 年経ってそのままだったら何にも…。みんな、文化も覚えた、言葉も覚えた。インターネットのおかげだとか、SNS のおかげだとか、TikTok とか Instagram とか色んな。日本だけではなくて世界も変わっていると思う。それが、みんな国の良さとか前より理解できるようになった。日本はこんな国、ペルーはこん

な国とか、インターネットのおかげで。

神田さん

インターネットのおかげだったり、時代が変化して、海外から来る人の準備ができるようになってきたとういことですね。

上江洲さん

今だと知りたかったら、すぐ調べられる。こんな国だとか、こんなことだとか。前は、日本でもそう、ペルーでもそう。インターネットが無いから調べるとかできない。知れる方法は無かったから。例えば、前は日本のテレビしかなかったんですよ。日本の番組しかないから。まあ、日本語覚えることも良いんだけど。今みたいな、インターネットで、YouTube 見て、向こうの動画も見れるとか。それで変わったと思う。50%、40%はそれのおかげで変わったと思う。

神田さん

自分の違う人のことを、実際会わなくても、インターネットで知識として知ってるから、びっくりしなくて済むということですね。

上江洲さん

それと、最初はそんなに自分の子どもの小学校とかも日本人の子ども達だけだったんですけど、今だと少なくとも外国人の子が5、6人いる。20人いるとか。

神田さん

質問に書いてくださった方の中にも、小学校の時、同級生にいました、と書いてくださっている方がいます。金城さんどうですか？変わったこともあるけれど、まだまだ全然変わっていないという話もありましたが。

金城さん

教育の問題は昔からあるなと思います。ただ、だからと言って、私は日本に来て大学も大学院も出させていただいて、色んな機会もいただいているなかで、私日本に感謝していません、と言えないんです。日本にすごく感謝しているし、もしブラジルにいたら、大学まで進学していないと思いますし、いろんな経験をさせていただいたので、日本という国にはすごく感謝しています。だからこそ日本が自分の居場所だと思いますし、住む場所もあれば仕事もあれば、安定した生活を送れるのは、日本で育て日本で生活しているからだと思うので。そこはすごく感謝があるんです。ただ、やっぱり、問題は昔から変わっていないのは、子どもの教育問題は、昔から日本の教師の問題だとか、不就学の問題。ある地域では不就学0という地域もあれば、未だに不就学がたくさんあるという地域もありますし。特別支援学級の問題でもそうですけど。例えば、毎日新聞が行った文科省の調査でも、日本人よりも外国籍の子の方が特別支援学級に在籍している確率が高い、とか。そういう問題っていうのは、昔から変わっ

ていないと思います。

神田さん

子どもの置かれている環境は実はそんなに変わっていないのではないか、という問題提起。ありがとうございます。今のことと繋がってくると思いますが、小学校の頃に同じクラスにブラジルの友達がいました、と書いてくださった方がいます。言葉の壁があり、子どもや保護者は学校に対して言いたいことが言えているのか。教師と保護者の間に入って通訳できる人が常にいないが、自動翻訳ツールがあれば使いたいと思うか、それとも間に入れる人を育てた方がいいと思いますか。

金城さん

私は今児童相談所で児童心理司として働いていて、ポルトガル語の通訳が必要な家庭の場合は間に通訳として入ることがあるのですが、やはり同じ言語が話せる大人がいるということの、子どもの安心感がすごくあると思います。なので、信頼関係もちろんだと思いますが、事実を話してくれるということを身をもって感じています。翻訳機があれば助かることも沢山あると思います。ただ、福祉の現場では専門用語が沢山あって翻訳機が全て翻訳できないと思います。日本語では存在する福祉用語がポルトガル語には存在しないということがあります。日本に存在する「特別扶養手当」「障害児福祉手当」という言葉があるのですが、それが確実にポルトガル語に翻訳できるかと言えばできないというところもあります。なので、翻訳機に頼るからと言って全て伝わりとは限らないですし、じゃあ要請して人件費を沢山かけてやっていけるかという現実につきあたりますし、お金をかけてくれるシステムがあればいいのですが、そのお金も永遠に続くかと言えばそうではないと思います。社会情勢とか政権とか色々関係してくると思うので、そこが難しいと思います。

上江洲さん

保見ではグーグルを使っていません。例えば日本人のサ責（サービス提供責任者）もいればペルーのサ責（サービス提供責任者）もいます。ペルーなどの外国人の利用者さんが一番多いです。彼女にスペイン語で書いてもらって、それから日本語に訳してポルトガル語に直して、事務員さんに見てもらう。介護の資格がないとサ責（サービス提供責任者）ができない。私たちは外国人だから日本語ができて事務員さんほどのことはできません。ケアセンターほみには、日本人もいれば、外国人もいるから、ケアセンターほみです。日本人はスペイン語が話せないから日本人は通訳ができないですし、ペルー人、ブラジル人だけでも何もできない。両方がいたからこそここまで出来ました。サ責の仕事であるモニタリングが出来る人も貴重で、出来るのであれば、それもやってもらう。慣れる、育つには2, 3年かかるかもしれないけど、それでも仕事をしている。今は事務員さんに見てもらっているけど、そのうち見なくてもよくなると思う。だからそれで人が育ちます。

神田さん

どちらかだけではなくて、両方必要だということですね。私も通訳やコーディネーターをしているのですが、コミュニティ通訳の分野では、ナツミさんが言われたように言葉をただ置き換えているのではなくて、相手に安心感を与えたり「あなたのそばにいるよ、だから大丈夫だよ」みたいなメッセージを伝えながらその人に必要な情報を伝えていたり、その人が相手に伝えなければいけないことを引き出したりという役割があり、とても大切だと思っています。自動翻訳で大丈夫な場面もちろん沢山ありますが、ここは自動翻訳ではダメだという場面も沢山あります。おそらく、お二人もそのような場面を沢山経験されていて「ここは自動翻訳だな」「ここは人間の通訳者がいいな」というのが分かるのですよね。それを間違えると大変なことになってしまう。人がやらなくてはいけないところで自動翻訳を使ったり、自動翻訳機でいいのにわざわざお金を払って人を呼んできたりというような判断は、なかなか難しいと思います。どちらか一つではなくて両方必要。自動翻訳機をきちんと使いこなせるような人を育てるということもとても大事だと思います。最近思うのは、大学の授業でも時々やりますが、自動翻訳機をつかう回数を重ねて自動翻訳機能が使える人を増やすということです。お二人はどんな風に工夫されていますか。

上江洲さん

サ責の仕事をモニタリングできないとサ責になれないから、使ってどんどん使えるようになって、モニタリングだけではなくて計画も作れるようになるとかです。

金城さん

現場で働いていると、いざ出勤して事実確認をしてというところは自動翻訳機だけでは対応できないところはあると思いますし、逆に書類だったら自動翻訳機で全然翻訳が間に合うとことがあると思うので、本当にすみれさんがおっしゃったように、自動翻訳機を使いこなせる人を育てることがすごく大事だと思います。

神田さん

小学校や中学校から教育の現場で子どもたちが自動翻訳機を使っているところもありますし、そういうことが出来るようになれば良いと思います。もっと言うと、小中学校の教科書を自動翻訳機能で変換できるようなテキストにすれば子どもたちの教育がもっと保障されると思います。学校の中で教員を含めて理解は進んでいるでしょうか。金城さん、もっとこうだったらいいのにとすることはありますか。

金城さん

私は日本の教育を受ける中で小学校の時でもすごく様々な先生に出会ってきました。すごく私のことを理解してくれた先生もいれば、全く理解してくれなかった先生もいると思います。それは、人生が与えてくれた経験やきっかけだと思っていて、優しく「ポルトガル語を勉強してあなたに母国語で話しかけてあげるよ」と言ってくれた先生もいれば、「どうせ工場働くから高校に行く必要が無い」と言った先生など、様々な先生がいたと思います。私が言った時代は上江洲さんがおっしゃったよ

うに、まだブラジルの子が教室に少ない時代、異色な人という風に見られていましたが、今はそうではないと思います。保見でもそうですし、私が育った岐阜県でもそうなので、一緒に育って当たり前の時代になっていて、やはり理解が少し変わってきているという風には思います。ただ、もっと大学で教員を目指されている学生に対して外国籍の人たちはどういう方たちで、なぜ日本に来ることになったのか、どういう生活をしていてどういうことに困っているのかということ、もっと教えてあげる機会があると、もっと理解が広がっていくのではないかと思います。

神田さん

上江洲さん、高齢化が進んでいる外国人の方たちの課題が色々ありますが、今何が必要だと思いますか。何が出来ると思いますか。

上江洲さん

今保見ではない他のところに住む外国人の高齢者は介護保険制度を知りません。何年も保見に住んでいる人だったらなんとなく介護保険がどういうものかが分かるけど、詳しくは分からないし、日本語ができない人はもっと分からない。だから一番大事なことは介護保険制度について教えて、その人たちに知ってもらうことです。

神田さん

金城さん、これからもっと力を入れていきたいこと、実現したいことは何ですか。

金城さん

難しいですね。早期目標と短期目標があって、障がい児の分野でも長期目標と短期目標で支援するので。私の短期目標は、今児童相談所で働いているのですが、11月末をもってまた障がい児の放課後等デイサービスに戻ることになっているので、児童発達支援管理師教員者という立場でもっと経験を積みたいと思っています。これは日本人外国人関係なく経験を積みたいです。長期目標は、永遠の葛藤になると思うのですが、帰化をするかしないかというのは私の中ではずっと思っています。帰化をしたら出来るのが沢山あるし、帰化しないとなったらこれからも葛藤を抱えながら生活をして行くことになるのですが。まとめると、これからは安心して一人の社会人として日本でこれからも生活をしていきたいというのが長期目標です。

神田さん

上江洲さん、日本に協同組合が根付きにくいのはなぜでしょうか。

上江洲さん

自分の国ではよく協同組合があります。みんなそこで集まって、なんとなくだったのですが、私も18歳、19歳で日本に来て21歳から会社に入って働いていました。そうすると社長がラインにいないかも知れないんですが、誰かの命令に従って動くんです。それで介護を勉強して名古屋に訪問ヘルパーの経験を積みに行って戻ってくる。

途中でやめる子もいて、結局私に任されました。給料はそんなに良くないけど、いろんな経験や勉強になるよと言われました。勉強は嫌いじゃないから、試験を受けて、これだったら普通の会社にできないことだと一番はじめに思いました。労働者協同組合とか生活協同組合だから外国人でも、大学を出て無くても能力があれば任せてくれる、能力を引き出してくれるというところで、一番初めにこの道に進みたいと思いました。そしてどんどん利益だとか色々なことが分かってきて、みんな同じ仕事したり、これでいいかを説明したり、仕事を交代でやるようになってきました。例えば、私がまとめる役割ですが、みんなが意見を言います。私が反対をしても、みんなで決めたことを優先します。私が責任者なだけでみんなの仕事です。それをみんな分かってくれます。だからそれが楽しいことであり、一人では絶対にできなかったことです。

神田さん

ありがとうございます。協力できる仕組みを知っていれば、これがいいというふう
にみんなが集まってきて一緒にやろうとなりますね。でもなかなかそれを知っている
人が日本ではまだ少ないのかもしれない。

(きんじょう ならや なつみ/NPO 法人ブラジル友の会)
(うえず けいこ/高齢者生協ケアセンターほみ 所長)
(かんだ すみれ/愛知県立大学生涯発達研究所研究協力者)